

郷土を知り、郷土を愛する

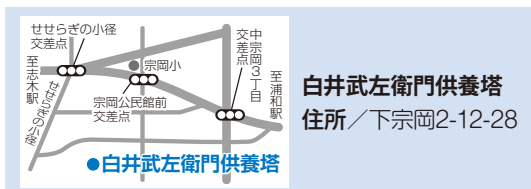
志木市 歴史とんぼ

— 執筆・協力 志木のまち案内人の会 —

第43回 白井武左衛門

白井武左衛門は江戸時代初期の人物で、当時上・下宗岡の領主であった旗本岡部氏の家臣として仕え、宗岡の大恩人といわれています。この供養塔は、江戸時代後期の文化10年(1813)に建てられました。

宗岡村は新河岸川と荒川に挟まれた低地にあり、度々洪水に見舞われていた一方で、用水の不足にも悩まされていました。白井氏の第一の功績は、新河岸川を跨ぐいろは樋を架け、野火止用水を宗岡の地まで導水したこと



です。当時、志木(引又)を流れた野火止用水は、そのまま新河岸川に流れ落ちていましたが、対岸の中宗岡を領していた川越城主松平信綱(伊豆守)の許しを得て事業を進めました。

また、洪水に対しては、上流側の南畑地区との間に佃堤を、下流側からの逆流を防ぐ新田場堤を築き、宗岡は村を囲む総囲堤によって守られることになりました。

野火止用水により生産力は大いに向上し、総囲堤により洪水の恐れが軽減されたことから、村人の白井氏への感謝の念は大変深いものがあります。この供養塔の建立もその一つですが、明治41年に頌徳碑、同43年に治水碑が建立されています。さらに、かつては7月15日(旧暦6月15日)の天王祭に「白井様の祭り」と称して白井氏の功績をたたえる行事が行われていました。

供養塔のある墓地は観音寺の跡で、白井氏が再興したといわれますが、残念ながら明治はじめに廃絶しました。また、供養塔上部の黒い箱型の部分は鉄製で、当時としては大変珍しいものです。下部の銘には、中央に白井武左衛門殿、左右二行に用水開基佃堤新田場堤築作と刻まれています。



▲白井武左衛門供養塔



現場の「声」を育て、活かすために。

新年度がはじまり、新生活がはじまった方もたくさんいらっしゃると思います。新たな門出を迎えた皆さまへお祝い申し上げます。

さて、志木市役所にも新規採用職員が入庁し、職員数は総勢約400名となりました。埼玉県市長会の調査(令和5年4月1日時点)によると、県内市の職員1人当たりの人口数は平均で147人。一方で、本市は192人と埼玉県内でも一番多く、他市に比べて少ない職員数で切り盛りしていることがわかります。一方で、少子高齢化、グローバル化、デジタル化等の変化が激しい昨今では、新たなニーズが次々と現れ、的確かつ柔軟に対応することが求められています。

限られた人数・資源で対応していくためには、時代の先を読み、想像力を働かせることができる職員を育てることはもちろん、新人からベテラン職員まで、実際の現場を熟知しているすべての職員の声を聞き、それを課題の解決に活かすことも重要です。

そのための取組の1つとして「職員提案制度」があります。この制度は、職員自らが、現場の課題解決や市民サ

ービス向上につながる提案をできる制度であり、毎年度、創意あふれる提案がなされています。これまでに、庁舎のグランドテラスで良い香りと賑わいを創出しているキッチンカーや、高齢者の皆さんの買い物支援に加え地域での見守りの役目を果たす移動スーパーなどが提案され、実際の市民サービスにつながりました。

また、令和5年度は、コロナ禍に後押しされ急激に加速したデジタル化に、市としてもタイムリーに対応するため、電算部門だけではなく、窓口や会計担当も含めた幅広い所属から、現場を担当する若手職員を集め、DX(デジタルトランスフォーメーション)推進チームを結成しました。若手職員ならではの柔軟かつ型破りな発想を原動力に、電子申請やペーパーレス化といった、市業務のデジタル化について研究や提案を行い、100種類以上の手続きを電子化するなど、24時間365日の申請を可能とする「市役所に行かなくていい」仕組みづくりの推進に大きな役割を果たしました。

新たに入庁した職員は、半数近くが社会人経験者です。ここ数年の傾向としては、民間企業からの転職者も多く、市役所にはない視点による提案や、民間の発想による業務改善など、新たな声を届けてくれることを期待しています。

現場の声が通る、風通しの良い環境を作ることは、課題の早期発見につながるとともに、「課題を自分ごととして考える」きっかけにもなります。改めて「職員一丸で」の思いを共有しながら、市民の皆さまの声に耳を澄まし、積極的に課題を掘り起こす姿勢を大切に互いに力を合わせていきます。